



訓幼字義

二

續々群書類從
教育部
中山閱了

仁13
1.620
2



仁 1620 2

訓初字義卷之三

仁 九二十八訓

仁にの義、悲愴ひの注ひろく物よ及て。内か遠近行りと
~~た~~決ずしるとあととのふとありちて不のま乃万の徳括す
 人の須更もある人のさらものあり。經書に仁のとくまま
 あらも畢竟人の志のびらの注ひらうてどとのとありて益み
 曰。人皆有所不忍達すと於と所忍仁也。又曰。惻隱の心仁と
 謂也也。此の語とひて。仁の字乃本字正訓とん得べし。
 後せよ及て。仁と人のとあるの注ひらうて。無欲至釋と仁に
 いらうのとまし決す。皆佛老の說よあり。聖賢仁とのとあるの
 の旨よあり決す



訓初字義 卷之三 一 仁

した。何ぞの語と云へば、誠の字と訓せしや。畢竟宋朝の先
 儒、何ぞと仁と釋しんば、たゞもあつて、かく解せざるを
 いと聖人の旨とあはれ、やうに、その人の為よとあ
 りあつた徳あれば、父文子が行迹の、これか、あつたよ
 り、このあつた。忠清と云ふ、このあつた。仁といふを
 此の、このあつた。兼註、又陳文子、まゝと論じて云く。案、此去
 礼、可謂清矣。然未知其果見義理之當否。而能脫然、忘累
 乎。抑不得已於利害之間。而後未免於怨悔也。故夫子特許之
 清、不許其仁也。是の先儒の仁といふもの。無欲と云へ
 る、本然と云ふ、ゆゑ、清といふ仁に、混合して、是かあり。それ
 は、あつた、この清と云ふ、仁と云ふ、利害の、このあつた、
 色して、怨悔と云ふ、あつた、仁といふ、あつた、清といふ
 か、この、本文の、たゞ、不義の、因と云ふ、このあつた、清、清たる
 し、あつた、仁の大徳と云ふ、人といふ、このあつた、仁、清といふ、
 別を、あつた、このあつた、詳あつた、童子、同と云ふ、あつた、
 張、張、仁者、覺と云ふ、説と云ふ。又謝上蔡と、覺と云へば、仁と説く。
 張、張、張、このあつた、禪、このあつた、仁と、禪、このあつた、
 見、このあつた、このあつた、このあつた、上蔡の、このあつた、
 此、このあつた、又、釋、このあつた、このあつた、所謂、信、このあつた、
 佛、このあつた、このあつた、子、報、このあつた、このあつた、佛、このあつた、
 子、謝、このあつた、このあつた、このあつた、大意、このあつた、覺、このあつた、
 此、このあつた、このあつた、このあつた、覺、このあつた、このあつた、仁

した。何ぞの語と云へば、誠の字と訓せしや。畢竟宋朝の先
 儒、何ぞと仁と釋しんば、たゞもあつた。かく解せざるを
 いと聖人の旨とあはれ、やうに、その人の為よとあ
 りあつた徳あれば、父文子が行迹の、これか、あつたよ
 り、このあつた。忠清と云ふ、このあつた。仁といふを
 此の、このあつた。兼註、又陳文子、まゝと論じて云く。案、此去
 礼、可謂清矣。然未知其果見義理之當否。而能脫然、忘累
 乎。抑不得已於利害之間。而後未免於怨悔也。故夫子特許之
 清、不許其仁也。是の先儒の仁といふもの。無欲と云へ
 る、本然と云ふ、ゆゑ、清といふ仁に、混合して、是かあり。それ
 は、あつた、この清と云ふ、仁と云ふ、利害の、このあつた、
 色して、怨悔と云ふ、あつた、仁といふ、あつた、清といふ
 か、この、本文の、たゞ、不義の、因と云ふ、このあつた、清、清たる
 し、あつた、仁の大徳と云ふ、人といふ、このあつた、仁、清といふ、
 別を、あつた、このあつた、詳あつた、童子、同と云ふ、あつた、
 張、張、仁者、覺と云ふ、説と云ふ。又謝上蔡と、覺と云へば、仁と説く。
 張、張、張、このあつた、禪、このあつた、仁と、禪、このあつた、
 見、このあつた、このあつた、このあつた、上蔡の、このあつた、
 此、このあつた、又、釋、このあつた、このあつた、所謂、信、このあつた、
 佛、このあつた、このあつた、子、報、このあつた、このあつた、佛、このあつた、
 子、謝、このあつた、このあつた、このあつた、大意、このあつた、覺、このあつた、
 此、このあつた、このあつた、このあつた、覺、このあつた、このあつた、仁

一云。仁難也。不得。上蔡諸公。不把愛做仁。又論語
 或問。謝氏の說をして曰。蓋亦生於以覺る仁。而謂之非仁。其說
 耳。又曰。朱子の意に入。畢竟子韶上蔡の說。何をさる。遠
 いて仁の義とさうしてをさす。おの仁はあらず。こふ非くさく
 ぶ。朱子辨雜あるを。集註仁のさる解より。又覺の義と
 非くさく。

又公の仁と。仁と割さるの說あり。まを難う難うあり。こくと詳し
 せ。程子の曰。只是仁の理。不可將公便喚做仁。而以人作
 ら。故為仁。又朱子文集或人々書簡より。或以仁割覺。割公者
 と。こつ。愛時と。仁と割さる人あり。こをさす。程子のまれ
 と。非くさく。仁者にて地美揚と。一併と。あつ。仁の理と

一云。仁は。公のさる。彼れをさるのさる。仁と割
 せ。程子の曰。只是仁の理。不可將公便喚做仁。而以人作
 ら。故為仁。又朱子文集或人々書簡より。或以仁割覺。割公者
 と。こつ。愛時と。仁と割さる人あり。こをさす。程子のまれ
 と。非くさく。仁者にて地美揚と。一併と。あつ。仁の理と
 一云。仁は。公のさる。彼れをさるのさる。仁と割
 せ。程子の曰。只是仁の理。不可將公便喚做仁。而以人作
 ら。故為仁。又朱子文集或人々書簡より。或以仁割覺。割公者
 と。こつ。愛時と。仁と割さる人あり。こをさす。程子のまれ
 と。非くさく。仁者にて地美揚と。一併と。あつ。仁の理と

解さる。義者。宜也。仁の例あり。後世の說より。人々

のほと裡より中うにあらうべし。人の心と解せらるれば又も上の
 ところの平者の註より人を知る解あり。そのあやほあり。又生
 のまを以て訓じていふ説あり。そのいふにけりあり。諸類ふあ
 べ。近思録註をもまればよく

程子曰。滿腔子は惻隱之心。腔子ハ軀殼と註し。血
 裏と註す。人の肌と云。人の血ふみちく。皆惻隱の心
 といふあり。世にあらはれ。甚しきあり。あはれやうけられぬ
 朱子の説は曰く。滿腔子は惻隱之心。不特是惻隱之心。滿腔
 子は羞惡之心。後腔子は辞遜之心。後腔子は是服之心。後
 之塞都之空缺處。又曰。如刀割着亦痛。針割着亦痛。葉平若
 曰。人々一血。惻隱之心。血不足。故疾痛疔瘡。筋則也。此
 意ハ惻隱の心人の血より不足してある人ハ血にあらざる人ハ
 徹し。あはれあり。一と云く。さむきむき。一と云く。さむきむき。さ
 うと云く。湯とれは湯と。一と云く。乃至血と云う。換とれは。一と云く。さ
 げと云く。程子の語。朱子の意。乃て。一といふ。之を。程子の語
 不又曰。人生乃也。有是人斯具是形。故以惻隱之心。人生乃也。
 一あり。後ハ後腔子を惻隱之心と云く。朱子の意。乃て。一と云く。
 あら。一と云く。又仁と云く。人の心。生裡。一と云く。さむきむき。さ
 め。説出來たり。是と云く。腎の意。乃て。一と云く。仁ハ人々と云く。
 の徳。さむきむき。一と云く。吾惻隱の心。乃て。一と云く。故ハ惻隱之心
 仁と云く。一と云く。さむきむき。一と云く。相あり。一と云く。一と云く。
 程子之書。仁又云。切脈可以體仁。朱子語類。揚乃。又曰。脈を

訓文守義 卷之三 六 造造齋藏

那血氣周流切脈則便可以見仁曰然脈理貫通乎一血仁之
 理亦是統也カクニトシあり程子又云親親離此可親仁カクニトシ程子の云く小
 小之物生理悉具又云初与頼底便之云當是時歎咏自如カクニトシ
 不謂爭鬪侵凌之患者只此便是仁也カクニトシ程子又云此說中
 ありカクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ
 生理之仁也カクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ
 生理之仁也カクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ程子又云此說中ありカクニトシ

論語集註云仁者心之理心之德孟子集註云仁者心之德
 心之理也二の心前後の心は心之理と心之徳とを指す
 畢竟論語の孝弟の章あり由人先は心之理と心之徳とを指す

の本條と仰りゆゆ人の徳と云ふは孝弟なり何れも仁
 不然也云々云々雲降胡氏此二句殊困と云れん心之徳為仁
 心之理為用之云云此二句あり程子の言はあり
 此二句あり程子の言はあり程子の言はあり程子の言はあり
 仁は心之徳と云ふは孝弟なり何れも仁
 不然也云々云々雲降胡氏此二句殊困と云れん心之徳為仁
 心之理為用之云云此二句あり程子の言はあり程子の言はあり
 此二句あり程子の言はあり程子の言はあり程子の言はあり

して人のありがたし。さうして平昔の義志の流し流し
 ると通るんことを我父子兄弟のていしでしはまじはらう君は
 忠と盡し。或父母の孝とはしとてありがたし。その入れ
 してのありて。貴族も卑親疎を近の差別。そまじら
 づまじ。そまじく小意接とらるるに。仁のふまのめら合
 けり。なら。たふ人のれとあひいにあり。後世も人に表服と
 けしむ。そまじらあつがたし。父母の三年の表と服し。祖父母は
 一期の表と服し。その飾表親を威し。九月及び二月の
 あつて。その恩をむくひ情とのれ。仁とたて。その類あり。
 惣じて。れらふもの。仁は條理ゆふとさうさふ。廣く
 國都は邑望郷村と多し。さうなう園圃は。戸堂庭と別じ。じ
 まつらふ。れ守りあつて。故は夫子。己小あれ。れと人のさうに
 として。つ。孟子。れ。其。其。斯。二者是也。中庸。仁者人
 親親為大。義者宜也。其賢為大。親親之教。其賢。等。礼。其也
 とあり。あまは。れ意に。あつて。能く。さう。さう。と
 つて。一日を。復れ。て。下。帰。仁。天下の人。仁は。改服と
 つて。又。條。同。く。あつ。時。に。親。疎。言。動。う。あ。と。れ。よ。あ。つ
 い。い。い。い。そ。昔。を。明。白。あり。先。傷。の。語。は。お。と。ら。く。こ。い。い。家
 親。親。と。い。い。れ。の。大。理。の。其。れ。又。と。い。い。仁。の。の。金。法。あ。れ。と。人。欲
 又。お。つ。ま。じ。い。い。あ。つ。さ。う。あ。ひ。そ。と。後。も。人。欲。よ。あ。つ。さ
 つ。い。い。そ。の。大。理。の。其。れ。又。と。い。い。仁。の。の。金。法。あ。れ。と。人。欲
 と。あ。つ。の。あ。つ。つ。あ。つ。つ。の。人。仁。者。し。ゆ。う。あ。つ。さ。う。そ。の

深く仁と云ふの言とのまひに邦家と云ふと云うた
 まふそ又分明あり集註は教以持己恕以及物則私意を所
 容而ん能全夫と云うもそも一心を收斂しと云うのね
 意を以て仁と云ふ上の章はけりて意と云ふ怒以及物の二
 あとと云畢竟存心の理はかくありま子の言はあや
 司馬平の同は仁者其言也教あり恕ありと云うと云う
 物の言と云うひ久しと云うあり或はえもあれと云う
 小取をういさうやと云うたやといひ畢竟物と云ふ
 てんと何と云おつらうらおつら仁者といふもの人とは切
 りて何と云ひてもやと云うはあやといひ或ははひ
 けりて何と云ひてもやと云うはあやといひ或ははひ

まれんをささひんと云うひのけりてえされども人
 徳りあごむく味あごむくたさと仁者といふ巧言令色の章
 しあるをささひ。集註は云仁者存而不放故と言義有所
 忍而不易教もそを放んせらうと云うと仁と云上の章と
 けりてあり
 樊遲に多とありを問うて二章をけりてあり
 仁と問の章はだ一章ありま子の言はけりて恭執事教也
 人忠維之夷狄不可棄也とのまひに人とするの言は
 けりてあり物と云ふ切はけりてありてありてあり仁
 又のまひにありてありてあり集註くりに註あり新安
 陳氏曰此与若仲弓同仁章當參看彼以教恕言此以恭

致忠言蓋居知恭靜時致也。執事致。動時致也。忠即怒體。怒
 即忠用也。而已矣。動靜恭敬。表裡忠怒。又能持守也。而
 所私意何容。而仁豈外是哉。少し私意と云うは仁
 もうと云う。上はけりたるあり。その内存文は恭敬忠と云へ
 奉れ。そるるは。小註の意もい。その致のこゝある。程子の此
 章のこゝ。此是徹上徹下語。聖人初二語也。と云ふは。下
 して。その皆宋明の学持致と云う。やうくみりて。や
 のこゝいあも。聖人仁と云うの方いあ。仲弓の章にも。
 致忠養敬。のこるは。後世と云う致のこゝと。取も例して推
 る。

論語に仁と云ふは。諸善も。慈愛の徳ふあつた。やうに云ふは。

多し。巧言令文。鮮矣。仁と云ふ。剛毅本納。近仁と云ふの
 類。何を仁と云ふの。こゝふあつた。やうに云ふは。されは。た人
 仁と云ふは。自ら徳の字ふ人。のこるは。多し。徳あつ
 人。のこるは。仁と云ふは。やうに云ふは。色用と云ふ。徳は。

何をあつた。やうに云ふは。不忠のやうに云ふは。何
 ぞ。何を。巧言令文。のこるは。多し。やうに云ふは。

何を。言諸顔色と云ふ。こゝに云ふは。人。のこるは。人。

何を。是。殘忍。利。薄のこるは。多し。人。と云ふは。物。と害。と云
 何を。不仁。と云ふは。多し。人。のこるは。物。と害。と云
 何を。と云ふは。何。と云ふは。何。と云ふは。何。と云ふは。

何を。剛毅本納の人。のこるは。多し。物。と害。と云

庸の註ありは、韓退之の系は、あれと性といふも、あれは氣
質の上なりは、ありて性といふて、宋傷のて、李程の性も、
理といふてあり

先傷の註は、元亨利貞の理ありて、四時流行して
て、又初の理とある。人け理とて、仁義礼智の性とある。そ
と李程の性といふ。大學章句序云、蓋自天降生民、則既莫
不与之以仁義礼智之性矣。小學題辭云、元亨利貞、天之
常。仁義礼智、人性之綱也。是也。程子曰、性も、
性といふて、經書の中、合せて、
何ぞあれは、
そのありは、
人よ又、
く、
仁義
の目ありは、
て仁智といふのありは、
義礼智の目ありは、
あれといふ常といふも、
そのありは、
にして、
や。人よ、
目又仁義礼智信の五つの物づらひ人の性ありは、
配當して、

人よ又、
く、
仁義
の目ありは、
て仁智といふのありは、
義礼智の目ありは、
あれといふ常といふも、
そのありは、
にして、
や。人よ、
目又仁義礼智信の五つの物づらひ人の性ありは、
配當して、

して詳畧多少はこと一概あり。又さうかへし何ぞ
 るを。中庸は智仁勇とあり。大學は仁敬孝慈信とあり。孟子
 は又仁義忠信とあり。仁義礼智樂とあり。易の系辭は敬以直
 内。義以方外とあり。論語は君子義以爲質。礼以節之。孫以出
 之。信以成之とあり。周礼は智仁聖義忠信とあり。け外仁義は
 配當し。條目とさうくして。あまう。経書は言ふなり。勇と
 云。敬と云。忠信と云。忠和といふの類。性の名はあまう。志う。仁
 経書は礼。不配當し。とさうくして。仁義礼智信
 のふつうなり。人は性といふる。うさう。さう。を。め。あり。勇
 敬忠和等の目と。又人の性ともさうく。あれ。又。有。者。ふ。あり
 ども

徳は賢の書は。仁義等の名目さうく。あれ。一定あり。さう
 して。何の故ども。曰。聖人のと人ともさう。た。人。の。良。徳。は。衆
 方と配當さうく。人の病は。内外虚寒のまあり。を。他
 何。か。と。水。火。の。変。た。今。の。運。四。時。を。暑。の。気。候。は。一。概。一
 概。は。定。さう。又。面。の。料。管。熱。向。と。一。概。あり。と。徳。は。ゆ。は。た
 今。さ。の。の。言。初。あり。者。病。と。さ。の。ま。あり。聖。人。の
 人。も。ま。さ。あり。人。の。の。接。一。概。あり。と。して。性。の。の。ま
 今。も。又。さ。あり。た。一。言。と。得。あり。と。い。こ
 今。あ。あり。人。の。ひ。ろ。く。意。を。さ。い。か。ふ。さ。う。ふ。さ。う。て。仁
 と。能。く。生。死。取。予。の。間。は。い。ま。あ。あ。人。の。あ。る。か。さ。う。か
 今。れ。義。と。能。く。物。は。い。次。身。程。あり。人。の。あ。る。か。さ。う。か

本然の信しつゝ。大なる人の信よなるなり

程子曰。四端不言信者。既有誠心為四端。則信在其中矣。朱子

曰。四端之信。非又別之土。而水火金木。亦不待是。以生者。其意

仁義礼智也。博くふふれを理あるふらうれ。けつろのものと

信しふらうと信しつゝ。又初の土よりうれ。形とて。四時より去

用のあること。別は物あり。仁義礼智と並稱するふあり

也。忠信約信の信し。名別けり。性理字義よ。又常之

信は。心と義理而言。忠信之信は。言と義而言し。そあり。然

をこと古聖人のこと。考ふる。言忠信。信近於義の類。

何れをこと。のたうら。と信しつゝ。四書六經の内。も仁

義礼智の義理と信しつゝあり。聖賢のこと。仁義

礼智の義。自ら徳と信し加れ。也。義理とんや。

或は仁とあり。信しつゝ。假に。色取仁と。義とあり。れ

後し。あり。義教と。信とあり。と信とあり。と信とあり。

後傷を求問のふ。仁義礼智信と並稱せ。也。

と。信の一字。程朱子の説し。あり。後傷の信と。忠信

約信の信し。つゝ。あり。揚子。信言は。仁義也。義路也。礼服

也。智物也。信符也。つゝ。符の。あり。約信

の信し。つゝ。國子の通書よ。守曰信。あり。信と。信とあり。

つゝ。信と。約信と守り。あり。何れも。仁義礼智の義

理と。ふあり。大抵。初學の。朱子。の註解。義疏の

ら。何れも。二。が。の。の。の。の。

人の言を用ひるより大智は徳と云ふより
ある。揚子とたのしく。衆人のことと云ふは智のあらず

訓初字義卷之三終

訓初字義卷之四

中義 中庸 九六則

聖賢の書に或は中と云、或は中庸と云。そのこと一は、
の内、少多別あり。中と云、物の中、
のあり、不及、
て、目と申さる。一身は、
あり。吾を前の文は、
の名として、未だ、
中、
禪、

後世も又かくいつくさるるものありあは編語よのむら。後世
 宗傷の説よのむら。聖人の儀く傳授する人法統の者
 あれふ。思ふも傳授する人法統の中庸を傳授
 するにうつり。中し中庸の義別上は論語を傳授あり。その上庶
 虞三代の時。風俗淳厚なり。仁孝の法あま好む。又
 仁孝の法。後世因のせら。世分のごとく詳あり。仁孝
 を傳授するもの。仁義礼智の目に入らば。好むものなり。仁
 孝は中庸の不及とあはれや。いせしむる人ある。
 允執中庸のこのあり。元カミ耕野讀書の管見よ。仁
 所謂中者。豈真有之。遠難行之事。非聖人不可企及邪。
 今恒言俗語。於事當不可者。則謂之中。不可者。則謂之不
 中。惟愚丈夫婦皆能言之。又何有傳授之秘。此説し有り。後世
 理のさる人あり。乃法教の各目と皆ん。具つるの理く。そしたる
 ゆへ。中を未發の心。然して。聖人相傳の法。このあり。たまた
 義のしむるなり。
 人の心もさるあり。性淡泊ある。生付た。このあり。な
 り。このあり。妻子眷屬といふ。このあり。又強盛
 多欲ある。生れは。このあり。多欲といふ。このあり。又強盛
 をあはれ。このあり。性淡泊ある。生付た。このあり。な
 面くの生れ付の生付た。淡泊ある。このあり。淡泊といふ。
 此の多欲ある。このあり。多欲といふ。このあり。又強盛
 下の人面。さるなり。このあり。このあり。このあり。このあり。

かんの中なるありし。あまを人い定本として。さうらうものいひ。
 不及ものいひ。けう祥まらぬやうに。さうらうの中。
 小云。乃く不行也。我知く矣。知者さうら。愚者不及也。乃く不明
 也。我知く矣。賢者さうら。不肖者不及也。堯舜の元執。中
 くのさうら。湯之執中。何事もさうらのこと。いひ。
 後世の説よ。人のさうら。あるところ。困の上あり。人の本。
 未後の中。いひ。さうら。又。さうら。と。謙と。さうら。
 さうら。さうら。賢と。さうら。
 肖のたひ。只平生人の上。さうら。さうら。のさうら。面。
 せ。いひ。さうら。さうら。のさうら。さうら。
 せ。揚子。いひ。さうら。中。乃。さうら。
 人。いひ。さうら。さうら。
 友。いひ。さうら。さうら。
 せ。いひ。さうら。さうら。
 今。いひ。さうら。さうら。
 せ。いひ。さうら。さうら。
 中。いひ。さうら。さうら。
 則。いひ。さうら。さうら。
 未。いひ。さうら。さうら。
 何。いひ。さうら。さうら。
 下。いひ。さうら。さうら。

ありていづこしあり。礼記等の書と考ふべし。けし四十七
 字あり。樂の徳と贊ふ者たるのみあり。中の述といふは
 らど。何ぞあれ。樂といふは。人々の喜怒哀樂と云は
 らる。そのあり。その多の清濁蜀のさひあへる。一は。可
 中といふ。溫和あり。敗つとて。あつとて。和といふ。さ
 多といふ。いづれ。地と初。鬼神と感づるの妙あり。右の
 四十七字。いづと考へ。礼記系記篇と考ふ。夫。民有血氣
 ふ。知く性而。喜怒哀樂。怒之常。其の下に樂ありと云ふ。又
 樂者。天地之命。中和之紀。人情之不能免也。又云。初也。而
 天地應焉。四時和焉。星辰理焉。万物育焉。又云。樂与地
 同和。又云。樂者。地之和也。と云ふ。いづれ。あましく。周
 礼大司樂。以樂造教國子。中和祗庸孝友と云ふ。漢書見
 寛が傳少也。樂のいと。稱美して。惟天子建中和之極と云
 又樂。中和樂之謂也。樂あり。礼あり。孝あり。忠あり。信あり。樂乃
 いと。中和といふ。能授多。後をいひ。四十七字。樂のいと。稱
 する。そのいれ。ふの。いふ。あつとて。いづれ。中庸あり。中庸ふも。い
 ぬ。うらみ。あま。中和といふ。再い。そのいれ。いづれ。中庸
 あり。その詳あり。先人。中庸教。揮又。そのいれ。論せり。

唐虞の時。その中庸といふ。孔子の論す。中庸の
 中といふ。いづれ。是あり。その由。唐虞の代。聖人といひて
 聖人のことをいひ。その新謂由仁義也。非新仁義也。是
 あり。その由。中庸といふ。其を。自則。又あり。樂あり。

あつた。夫子の意とあつたのである。あり
 誠者たる也。誠者人を知る也。い諸中庸よりと
 本夫子意よりとある。はあり。故と孟子の
 語あり。孔子曰く標也。と。當時に傳備の
 一と入る。誠者たる也。賢人の徳なり。故
 他意あり。誠者人を知る也。賢人の徳なり。故
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の

孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の
 一と入る。孟子に思誠あり。と。あり。それ
 以下の句に。誠者不勉而中。不思而得。後容中。賢人の

の徳と初と云ふより初と云ふは誠の義と為りて
 らるるあり。諸孟字義ふれり。其の義と為りて
 其偽し解と云ふは其の義と為りて。其の義と為りて
 妄と云ふ物のみより遠のあり。偽の物のつりつり
 のあり。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 たふと云ふも。安撫化るのつり。其の義と為りて
 つり。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 類せり。

忠信二則

忠信二字の二則。上と云ふ。小解と云ふ。其の義と為りて
 と忠と云物と相違ありと信と云。其の義と為りて。其の義と為りて

四書文行忠信と云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 小連綿と云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 類。多く諸孟の内はあり。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 律義と云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 以孝礼と云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 孟字義は忠信二字有朴矣不華文飾之意と註せり
 侯門云。盡こと謂忠。以事之謂信。論語二者の章の集註は
 されと云。明るの云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 孝章の末章に出ると云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて
 云く。侯門説得簡要確矣。明ら説得教誠條暢と云。其の義と為りて
 此二説と云。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて。其の義と為りて

恭敬 凡九則

恭の集註は致敬也とあり。又莊敬也とあり。又謙遜也とあり。
 けんぎの註あり。畢竟人の言語容貌の上は然り。今の人の
 けんぎはよむんさんありと恭くして致す物とすむいりあり。あ
 りまの物とすむ意あり。故に畏敬崇致を熱く用ひ先傷主
 一を適と致す人の説ありと。甚だ義あり。

恭敬二字の互列。先傷内亦は然り。此をいつる陳叔子
 義小恭。然免上説。致就心上説。又二程先生書も云。致於外
 者謂之恭。有諸中者謂之敬。孟子告子の篇の集註は
 恭者致之。致於外者。敬者恭之主。於中者。此は内

外なりと説き。然れども論語と考つる。君子九思。見思
 恭。事思敬とあり。司馬牛の伝と同一。君子致而無象與人恭
 而有礼あり。樊遲仁と同一。右如恭。執事致とあり。此は
 恭敬内外の善なりとあり。此は人々。孟子に恭敬
 之心礼之端也とあり。又恭敬者幣之未將者也。此は恭
 敬の初事にあらずと上は然り。そのこととして恭敬の心
 とは。一いつんはあり。一いつんはあり。孟子に恭敬
 とんといある。恭敬の二つ。者もあり。其は別ありと
 あり。

程子の恭敬の二つと一つあり。恭の字とたは敬の二つと説き
 不多し。程子の語も云。今學者致而不自得。又不安者。只是

人生亦是之教。亦做事。得重。此恭而無礼則劣也。恭者
 私而恭之恭也。礼者非礼之礼。是自然底。乃理也。只恭而不
 為自然底。乃理。故不自在也。須是恭而安。近思錄少也。是
 どのこと。げ意。礼の入り自然底の乃理と云。礼儀礼式のてふ
 あらうと。致してと。自然ありとして。けくろひためる指多
 也。恭而無礼の入りと云。又曰。君子修己以敬。安而後篤。
 恭而下平。唯上下一於恭敬。則天地自位。對物自直。と云。
 論語集註。よまをとのこと。あはれて下上平の功も持致あり
 出。あつてふとふれ。何をも恭敬のつと。この不後也。持致のこ
 とふらあつたりのあり。聖賢の言はあは。畢竟恭敬
 の二つはよ。論じらるるあり。けくろひらあは。少も差別あり。

恭而無礼の入り。人又對れ。けんをんあつて。けくろひ。あは
 ども。人よは。けくろひ。小貴。初上下の差別あり。吾らの言。あは。

手とは。き。首とさけ。平。交。初。初。又。相。應。の。接。移。あり。あは。と
 礼の入り。ひ。と。あ。の。い。ん。あ。つ。ら。れ。けくろひ。あ。は。と
 下。平。初。初。あ。つ。ら。の。も。首。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と
 けくろひ。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と
 礼。遠。心。存。也。い。ん。を。け。くろひ。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と
 四海之内。皆。兄弟。也。い。ん。を。け。くろひ。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と
 不見。然。の。致。し。つ。と。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と
 小。分。て。て。集。註。接。人。以。恭。而。有。節。文。と。解。せ。ら。れ。け。くろひ。あ。は。と
 明。ら。う。あり。然。を。バ。恭。而。無。礼。の。致。し。つ。と。あ。は。と。さ。く。ら。う。に。さ。ら。れ。あ。は。と

さうして、孝、弟、後世は、教とて、一、無過らぬ、心、を、
 同所要の、之、ま、し、せ、ら、る、に、ら、れ、恭、と、教、と、同、じ、に、ら、る、に、
 經書の内書、經、亦、ふ、く、教、宣、莊、肅、等、の、字、指、皆、持、教、に、
 不、解、せ、ら、る、を、聖、人、の、旨、は、か、つ、と、篤、恭、而、て、下、卒、と、の、旨、
 亦、そ、ふ、く、準、し、て、ら、る、と、

教、と、の、畏、教、を、取、の、意、は、聖、賢、の、一、は、也、と、所、謂、教、は、
 皆、率、に、然、り、と、ら、る、に、あ、る、に、論、語、に、教、率、而、信、
 又、教、鬼、神、を、遠、く、し、あ、る、に、孟、子、教、見、義、と、あ、る、に、その、外、
 教、天、と、云、教、君、と、云、教、親、と、云、教、人、と、云、何、を、と、さ、ら、ぬ、は、率、あ、る、
 に、そ、の、と、あ、る、に、は、し、し、に、あ、る、に、相、率、の、一、は、の、旨、に、
 せ、ら、る、と、教、と、の、後、世、持、教、の、認、り、物、ら、り、の、あ、り、て、聖、人、

教、と、の、る、の、旨、は、あ、る、に、禮、記、哀、公、問、の、篇、に、教、也、と、の、旨、
 持、教、の、認、り、や、ら、ぬ、に、あ、る、に、本、文、と、考、へ、る、に、君、子、無、不、教、
 也、教、成、る、と、成、也、者、親、と、教、也、教、不、教、也、と、あ、る、に、その、外、
 孝、悌、あ、る、に、父、母、と、大、切、は、は、る、に、孝、悌、と、兼、ふ、り、
 せ、ら、る、に、あ、る、に、持、教、の、認、り、は、又、論、語、の、修、己、以、教、仲、子、
 の、居、教、而、行、簡、の、二、語、後、世、持、教、を、教、の、認、り、は、は、る、に、
 夫、子、の、一、也、也、修、己、以、教、と、あ、る、に、その、外、
 孝、悌、と、居、教、を、行、簡、と、あ、る、に、その、外、
 孝、悌、と、あ、る、に、は、二、語、と、民、と、と、教、と、兼、ふ、り、
 せ、ら、る、に、あ、る、に、
 傳、は、た、る、教、と、は、る、に、
 何、を、と、け、例、と、と、

のちまふものなり。亦どぞ

聖門の第一の仁はあり。恭敬忠孝の類は皆仁といひしるゝもの
受用工夫あり。夫子の仲弓樊遲小答のつゝ也。孟子は孟子が
強恕の仁。來仁莫如遠害といふの類もくもんぞ。孟子は人々對
し如左あり。人のちちをどうする。物してちちにむきむら
んをばらうふゆるふらう。あつてはる。後世仁と性の程をえ
らるる人もあつて。あつてはる。存る理得と解せらるゝあつ
どけしとぞ。仁の修下はあつて。大抵を賢のどうぞ。本
粹あり。修るあり。仁義礼智の人の成とせしむるの目あつたり。
そとを修るの忠信忠孝恭敬の名。何を修るの名は
仁はとぞ。とぞ。しるゆえの工夫あり。上あつて。とぞ。論孟の

た。まを考へて。後小大學に仁政孝慈信と並ねる
の。專ふとぞ。修る。然し。孟子は仁義忠信の名を
の。とぞ。本修るゆゑ。あつて。あつて。あつて。
た。人の。とぞ。後世の。あつて。
そ。内大學に。仁と專君徳とて。廣く。衆人。然て。とぞ。
あつて。又論あり

先儒持致の説は。一無適と説あり。整齊嚴肅と説あり。
。常懼。はと説あり。そ。収斂不容。一物と説あり。何を
も。大學。或。同。詳。は。在。と。あ。つ。て。は。と。ぞ。一。無
適。と。の。後。の。説。は。幸。の。主。一。之。謂。致。無。適。之。謂。一。と。
集註。は。と。は。と。一。無。適。之。謂。と。解。せ。ら。る。と。是。も。け。義

納實く。余仲其其一一又後さうくは。若必死困必亡。を以て
れ。勿とあし。実と納る。公羊もさうく。右人の有推者。余
仲之推也。推者何推者。及於經。然後有善者也。及經の
説ら。勉めて。多ふ。易の系辭。巽以行推之。韓康伯が註
。推及經而合於必合於巽順。而後可以行推也。又論語子罕の
篇。唐棣之華。偏之反而何晏註。華反而合。賦此詩者。以言推之
及而後至於大順と云う。程子の澤傷く。此等の説と云う。
論語古本。唐棣の華。第一章の末。可支持と云う。連て一章た
る。さうく。偏之反而。この語。さうく。あつ。然も。程
。い。世不易の華。乃あま。程より。さうく。あつ。あつ。あつ。
程子の説。を信用と云う。

程子の説。は。さうく。あつ。然も。と推の即經也。と云う。は。
經權の義。別あり。朱子集註。五。嫂溺の義。以て。と云う。附の
經。權し。差別あり。と云う。又程子。推。濟。經。之。所。不及。と云う。説
あり。此等の。朱子。諸。類。は。さうく。議。論。あり。畢。竟。先。傷。ハ。
經。と。推。と。對。し。經。推。と。あ。つ。と。云。う。孟子。は。も。の。男。女。授。受。不。
親。禮。也。嫂。溺。援。之。以。平。者。推。也。あり。然も。推。の。由。を。示。し。不。れ。以。
以。れ。對。と。べ。く。して。經。と。以。れ。對。と。う。也。經。之。不。及。し。
あ。つ。も。を。以。て。さ。う。く。あ。つ。と。云。う。程。と。以。れ。對。と。う。の。意。
あり。的。當。の。説。は。あ。つ。也。
集註。は。洪。慶。善。の。説。と。あ。つ。と。云。う。權。者。受。人。之。大。用。未。能。言。而
言。推。於。人。未。能。言。而。勉。於。鮮。不。作。矣。又。朱。子。諸。類。は。云。經。之。危。

小。若。居。分。上。は。あり。て。入。る。ふ。う。て。ま。を。と。持。た。る。ふ。ま。を。後。に
 と。ふ。て。う。り。あり。後。を。と。め。の。て。く。入。る。れ。い。て。仰。つ。る。は
 あ。や。ゆ。う。て。あり。何。ぞ。あ。ま。り。若。く。の。の。い。や。ま。ひ。ら。と。み。て。
 あり。そ。め。ふ。と。ら。そ。ふ。せ。ら。る。の。あり。後。ふ。ま。ま。と。廢。し。て
 ま。を。よ。う。け。し。て。い。常。々。恭。敬。の。礼。を。さ。し。ふ。ふ。ら。り。て。ま。を
 と。持。て。い。ふ。が。う。い。ま。は。お。存。を。め。お。ま。ま。と。め。の。て。く。せ。ま。ま。を。
 たら。ゆ。ら。に。國。を。と。ほ。ら。が。う。い。ら。り。て。い。ま。の。ま。め。ま。を。ぞ。
 く。ら。し。と。く。侯。尹。の。大。甲。に。つ。ふ。ゆ。つ。る。を。あり。後。の。ゆ。い。ま。若。相。
 三年。居。仁。遷。義。あ。や。ゆ。ら。と。改。め。ら。る。ふ。と。び。て。い。ま。ゆ。率。
 を。り。て。位。は。あ。り。一。國。家。と。相。續。と。始。終。位。尹。く。大。甲。し。そ。居。
 の。ち。あ。り。た。く。ど。て。放。廢。せ。ら。る。ふ。ら。り。て。ま。を。と。持。た。る。湯。武。の。い。

へ。あ。ま。り。て。あり。先。若。と。の。ま。の。い。ま。と。安。む。ら。と。る。て。諸。侯。の
 一。國。と。安。ん。て。た。ま。い。て。ま。と。安。む。ら。と。る。て。諸。侯。の。一。國。と
 安。ん。て。ま。ま。り。あ。ま。り。と。對。せ。ら。る。諸。侯。の。あ。り。て。ま。ま。り。
 て。ま。と。治。う。て。あ。ま。り。と。夏。の。築。般。の。討。の。て。く。惡。逆。を。あ。り
 て。賢。人。の。肝。を。と。り。及。婦。の。腰。を。と。り。と。く。あ。ま。り。と。い。て。ま。の
 人。を。日。つ。ら。せ。て。の。ろ。ひ。移。ら。せ。て。あ。ま。り。と。い。て。ま。の。若。
 しく。ま。の。ふ。あ。り。て。ま。の。初。と。あ。り。ふ。築。が。祖。の。あ。り。討。祖。の。成。
 湯。あり。何。ぞ。と。せ。の。ま。ま。り。あ。り。て。仁。を。の。法。と。う。て。天下。の。人。民
 あ。ま。り。と。ま。ま。り。と。い。て。ま。ま。り。あ。り。て。天下。を。た。ま。ら。る。ふ。後。
 した。い。後。世。の。子。孫。を。送。ら。る。ふ。と。天下。の。害。あり。義。は。ま。ま。
 ひ。と。あ。ま。り。い。ら。り。て。天下。の。若。あり。後。ま。り。い。ま。の。なら。故

